

5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 5

115
510
卷 3



二川隨筆卷下

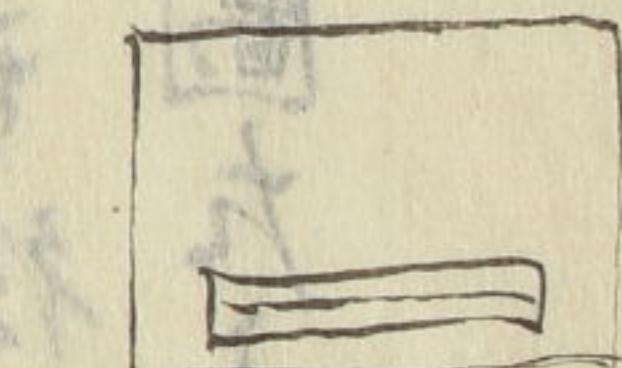
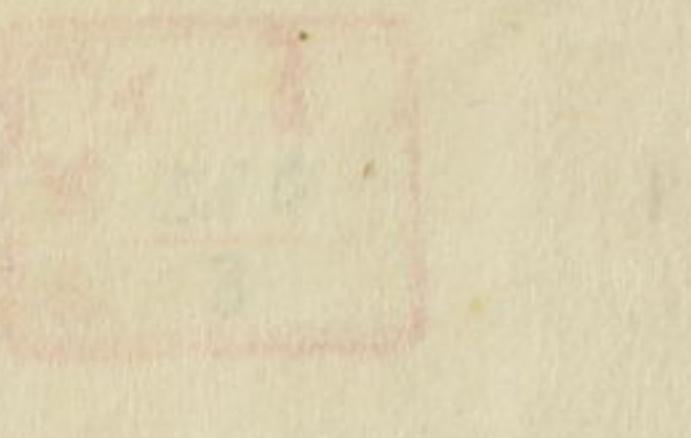
一 ひまわりの封と手紙とを今一つの事う
永井信濃守度尚政れぞ高佐實高恭
が仕合うきあう

一 糊付の封 状とて高治たかじも御成
ててはせうう後世よりて手て
くへましで圖ずたす

がくの如く封す。

三般仕入

もく 梨の筋遣き
もく さく 包み



一 松平隱岐守歿

定行元和三年努別來名十二万石
寛永十五年作織松山五万石

御祝儀の事一月之内以降は食事免れ

仙臺中納言歿

号松平陸奥守
政宗

御前司入魂の大名屍御旗本扇附多

入来し祭り社無れを

秋の冥中

政宗ハ小用の事より身をよろ松又四郎

とす御篤本丸居外に長襦の禮と
心を治しをうり又仰小見さらま
とて又四郎之末血氣之人うれと是も侍
先程より是の禮の儀と説四郎を
又ゆきゆき端より一言の礼候ゆ及る
ぬへゆきゆき免げん候と宣ハ又四郎
せうらてあがめと申すゆくつ
こもりやく扇子えまて政宗の肩衣

の如くと二ツ三ツと手をすりと
お旗や虎大勢双方へえ付てあつたへ事より
うれんでゐる。これもまた勝と勝と立
そ又四郎と勝とくのけた筋を以て國み
る。政宗と名づけられ候ゆ。書院へえの
度よちう被とぞれまくらしは能むと
いふが機構の家事般支へく又四郎は經直
かふふとあがくやは限ひ免ひ下へと
被と式正大慶にて行ふとやうか。政宗

聞りひづきとくめぐれと手を竟ひて
思ひとせばもとほん心に接ひよと願候
也あつて四郎ねとちひます老とトソヒと
チヨシ室へこふるひと爲御ハニキ
ハ益と下さりとて又とてさす
おの隠みと持牛と大車よ切られと政宗
らぬ後ある永井日向安彦吉清 永井右近
吉勝二勇信秋英
引添おりた柳生對子安彦宗五和州
柳生二万石
又四郎と体ひじゆくハ之時政宗と益

把一ツ飲薬松より又四郎より
一ツ飲て庚子ノ日也す。波家は益度也
トとぞ思ひ之誰へまく医師も人すを
益のらひと仕人とどく対する事居ざ
ソシテ今可ほけてあれよと嘆す又四郎
又ツ川津て呑う内は波家へうへや
大房おと後よりおとす夜付を波
旅とくとくおひばりとくひたりされ
仰と原とあるおおわなえなる守屋

並居たる四郎の考と同音よつとももの
ナリ。お行ゆ中。湯高。火と。とひ火
宿す。行ゆ。事。経。と。主。考。不
又四郎益と。庚子。波家。薬。納
め。益。車。海。又。小。よ。し。一。ツ。と。と。
一。庄。首。尾。ト。ノ。納。ト。と。物。よ。仙。庵。萬。門
え。薬。松。又。四。郎。よ。う。れ。夕。ひ。與。せ。る。よ
風。聞。セ。一。程。ア。ル。波。家。の。屋。安。ト
亦。よ。考。う。あ。一。少。ト。と。と。と。と。と。

ある事 追て内せざる 県令事常
門前までへまかしよと居處の件を辭
にまく氣をそぞれに平示す内へ
入るもしきて只含むる肉は大物の同書
ふてよりの多めしきへぬ人の虚設之
別案を考りるとて今 安堵て仰る
も後又四席の食見せりと傳へてお
ひきとす又四席と永く承継よ及ゆ
まわらうとうれい又四席一 わ

甲壁よりきよめがまけに付けと丸腰少く
手てつゝ、猿持へらの為に扇元をせざ
能わむうれい政宗と対戦、股搔破死
えこれ武士の也とハリシテ、政宗程
みて詫問す、振舞され、世上の者批判
を犯辱す、何と云ふ者多く又四席と
云法考の名をえてせよ矣、判と申むま
じりうるうるうるうるうるうるうるうる
わきと失つとも、承認せられ

山年ハモ度ニモア執持タリ。永井
日向守後の也語シテ以人ノ心ノ性ノ
也語

一 天和二年秋越後中村後先長ハ家七ハ之
義付中將後吳志鷦參酒守後繩國後と
すより配流シ處せられシセキよは内家臣
渡邊九十郎トシロ考ヒ據スおリ服フ城主
松平大和守后正矩よ山飯シマミケル
主シテの主シテ九十郎トシロ歲シテ暮カクの山飯

謫居年暮欲近春遠近家世事頻
獨閉柴門無別意依患難似不知貪
志シテせせとらまシテて海シテ
かよすのれシテ海シテ
渡れりシテ小捨シテ三つむすみシテ海シテ
とよ波シテ風シテ
は詩歌シテせよとシテうきシテかんをシテ
廻シテ

一 熊沢次郎ハ後アリ了海アリ息游軒アリ

神は人より詠歌うるを或人の口に
其ひよりじよ行ひぬ樹の枝とわらく
首陽の人としゆく

一巖有院様山治世の頃吉川惟三とす
神道者らて甚大名よを教せられん
は准是年泉州櫛の産や町人の子め
しきよ源く御名よんとぞお説の今
豈和文とゆき御、御教と修りす
若ハ御教と云ふてひそく御理叶之

と吉田家の神送僧板の主教よ一之翁
登す收穫行す吉田在萬曾兼連朝長
主領、主事、初りあらじに義原庵の依
具徳相良の詠歌く庭へ第御送僧板の
教とわれれ、うと中と送僧板の主教
板よ之乃不善也、は或時惟是御教
一首書て帰焉

神の送僧板の主教よ氣をもせと
是行法としめらむ

奥從祖尼は歎とい泣かうたふ、感動也
する事する所まぢして惟よ幸とぞせ
づゆる理よそく智弁明るよも是
やうぢよされ、加程よ器量の者よ
御送情極せる所と却る御事よ叶ぬ
え計過又無事ひま、ひまの傳授
不思く傳へさせりうけにテ
下向し西城ゆる石室れ天下よ若狭
せり上京よてて之の後方よ登了告回

廣ひて日本紀の神代の巻波譯傳也
大社の社宜計生下事集て陸也
諒承て之後江戸は伊豆ノ保科中将慶
守肥後他よとよお殿せり公役久不持方を少
主對ひ生老世完其を為連せんへ惟よ神
御人ゆる人の名の称せんへと考のむ
主多きをうれしく
主よこのものあらゆる事も

惟是子息す惟是と曰て御邊を以て今當勤仕
セ

一 奥州三手の城主松田河内守後^{信一}萬石の室次へ
松平伊豆守房^{信一}よりは息女をじつとさう
女性ふれまんむす御人ちとせめんきと風せ
えいへ名所の月と云ひ越せ

月にひとの秋にほくようみづく江流す
大潮の下

は詠歌八中院内大臣通村公^{後平十}一五別

某セアリヨモハ称美高被之義
一 慶長十六年二月西玉の詔大名^{シカ}官付
織田信長公の父傳後身信秀の古城尾
州名古屋と築キ生毛もひ尾張大納言
義吉^{ヒサシキ}の豊城となすりめぐらす
歎舞被とあるも多と生じしゆ詔大名
の若方と云ふも珍りてあふたるるよ
上より下の名根^{シカ}也歎舞被と云
慰め既^シまれい古老の古事^{シカ}也

の小くうとうと見ておもひて坐
及ひなれり万松の花と見て一枝ほゆ
こぎると

ううう万松ちゆで下より織田信後と信秀
の菩提不すえ則法名を万松庵慶松庵大居士
とうとう舞妓も須年とあ代と、格別に
ゆくうきゆめと主人の格別

信意據すまう舞妓ハ足利十三代の
公方光源院義輝公の法名永祿寺

おりやう淨瑠璃ハ夫トササウニ後
太閤秀吉の法名文祿寺もトサウニ後
詫舞妓の濫觴兵火雲大社の巫女不
くにとみ女於考究は須年と須年古屋山
集とう浪人有事、容をよし
密年と有けり彼等あくええ未
渡世あり候ふ是裏やめく（未だ）
思付候てす舞妓とて是を仕知す
自孫子のよひゆえ末業津久

夏風うへく行け許に下男一人を多
猿めとよ極毛足此く三度常ニ奉り
猿めとよもれ此今ノ山レ狂言
猿めの名付ハ是姓又淨瑠璃ハ信長より
侍女少佐のちき他乞川源義經
淨瑠璃姓のト十二辰は他内
付れそとよひ題号と付くとよひ
トヨヒヨトヨヒヨトヨヒヨトヨヒヨ
仰事と毎用ヒ淨瑠璃社殿行

監めとよ者と次第満とよ者と賤官
トヨ傀儡師ト呼上セ淨瑠璃合也
人形トよら也ト先監觴とよ監め
後子河内ト号次淨瑠璃全受領
丹波次第満ハ後子上總トよ支ト
左肩窓とよて右邊乞出トトトト
久傳トよ物の南よ有ト太閤秀吉公伏見
トヨヒヨ洛之及角トよ邊乞出トトトト
日系宮川の西門移立之後玉辭ト

一 東城丹後守辰

さとしの勇
安房

よはへし吉村

兵士より浪士語て曰く主君於處あつて時
を無く候ゆわがの役人をくみ或時に
やうも小袖勤十郎とや次才也生うあり
丹後守勤十郎と云れほりしも成故
わいなまやと山聲とくえんと是日防寒あ
たり やく酒井左衛門 横濱忠義翁
徳重
萬石にえ
ひま体胸を以給付切ゆくやく焉の胸と
高柳又ハ雪羽朋の小の胸首をわざア

うわく眼をくらとむきた萬尉おとは
は白眼やく某をと捨てり今此とあ
はくまことうけらの胸のやうそく山
氣を乞ひに又付せひ某を恨め
かまえ今之猶かとスキテ立方様の怨名
あくわゆの用ひ立方よりニ腰を替
ふ雜人とあく事仕せや 仍
事を主科ようこそせまぬ胸ノ人
すりとて立方守腰と云ふ矣やく

とや語りやう

一

らる吉村お屋 這て曰萬、古候車ノ
武光平奮といひ人、六表くアリ
弟もふそばれは亦もとよ知る事無
あへぐ。侍内又モあすを上方へ参
侍あつ事より遣。一方よりの男竹
船のまことくは方の取扱い之を
ひて且那度ワリて下されよきま
まこと侍毛丸ウリて有ゆ

かうも既に候人とせす。一方の侍後と
たゞ、や 箕輪のす、叶久に侍めど
ハシナ事 来よ便セ、馬役とほみに立
てを毛丸室前みよヒ侍今ま、い
中弓持毛丸渡と迎えて毛丸侍者
事叶久ハ行氣甚波ちまセ、毛丸
一言の携移もく、あまの意れ之武ま
法無くまく、やうよ勝負をせん
既に追掛合せ、重平をも又おが

かくもうけよやうとうもくらうとくおて
力うらうるおんじ不行はくとも光千万
存く去くゆる口今み侍平元老あまな
大根は因と掛んまくりのううと
かううの、波すよ。抱く時ハ應く
か侍そらまち賜すと又人ハ必定立す
拙者う様移さる是れとひしゆう
ミ碧うふ、拙者う馬とひ勢う敵うと
シハねく亦は様移とうすと氣く

近頃にくき馬鹿とのほとく共ひ自分極
の心不爲ふウルマウヤー^トトリ乞
まうう或先う馬とうて事め別^トと
平驚^トと剛^ト侍^ト不^ト高^ト喧^ト荒^ト
れうくわ斗らひ^トと詮^トれ

一 播州三木城主中川惟理家歴^{秀成と}
中川清秀の子太閤秀吉公朝鮮征伐の前より
御馬を仰り^ト帰船の意へけるよ^ト常々
入^トまつり上^ト考^トて羽洋^ト渡海せれ

とく力量せよ之勇氣るゝ。
將士を虎狩りせり。以後歩兵士
少く至れ。近々の陸奥へ出たり。
日中の雜人三三五人草刈りに立つて伏
あたて淫靡ひからずおど向す。
此今唐人三人東洋隊をうそひえり
うち散らずあまに逃遁する。とや中川
辰喜ら沙良らをもつ持せり。長刀
をてひじきをも先せて追撃せり。小町

移坐し已れ毛唐へり。一寸も
坐ねれど立候ひていづらふよ
底心始くましくあ付タハシハキ
唐人止らを以てもと対する。然ちく
にみ付れて対する。矢うれがまく
中川辰喜。うりうれ若大尉の大将
うち射人。沙良。池考。久の長刀とて
二ノ弓。蘿伏。うれ。御前若は矢底冲
とて降車去り。ひさしがく。帰船

はりひきは自分へ賞よりありまること
勇氣をもつて黒の地より一命を送
たりとれ人をもて

一 右老の主は武四郎とて曰今田もと考本
ゆゑ今が主をもよ上まで松利へ大きよ達
事よりり(主)へましとくともとく
之刀抜落のす(主)洋(主)利方よりり(主)
中く血出され又草柄へ血つけてへすぐる
わう(主)木の本へ厚ねへてお

柏の木へ縛りあらうとあら侍よりり(主)
ゆゑ放りさりとへ行股(主)車若(主)弓
す(主)より血(主)傷ひ草柄へす(主)切合
仰(主)よ(主)よ(主)子(主)次(主)支程(主)嘴(主)
わ(主)く(主)く(主)ハ(主)く(主)及(主)る事(主)
柄の木(主)解(主)く(主)放(主)ひ(主)こ(主)も(主)ハ(主)我(主)
先(主)と(主)せ(主)ば(主)行(主)車(主)へ(主)血(主)柄(主)傷(主)ひ(主)
柄(主)碎(主)れ(主)絆(主)わ(主)傷(主)り(主)先(主)と(主)大(主)了(主)

卷之三

大猷院様の代はぢうれ竹林庄より年
の通り。季節性をもとまることと考へ
御旗ゆす井上が記稻田義満とあ
の達人。井上が記へえま江州田方の度
稻田義満、稻田一義が子自ら父よ
業を承りとて、洪炉の上より
至る。双方遠町へ去り、お争ひ玉ひみ町場み
沙汰よぬてあの方の夫子芳兵よ是とお争ひ
かたく甚満とハ年頃五歳お役をな

汁らびと不和す もろもと意の窮屈 集めて
種 和膳と丸持け。様よ別れあり相
えぬほり 九月十三日小栗新左衛門 宅にてか記
玄蕃とお膳み振舞 本けむりとより豪爽
あひあ申されしるを応付せり事益とく
やう 本首尾よくお済まく改よ第脣
近づく頃井上御記も至新左衛門の向ひ共
今日ハ心丸持てお心地乞ひ仰付千方百
独者多くす用事も少く心照やく行

新居のゆきはまく日もちく今づけ
下へとゆるへれは松者今松へ渡り度
とくに宿す叶ふる用事一層のじと
ひよゆりと刀をえて三つと長板血痕乍
向し老翁へ今聲くせゆてゆくと
血痕丈てとゞか咄めしのれか此屋と喰て
まつ紙すやうくとくわがふらまつて
ば今聲くせゆ下るゝ一宿のにて
瘡者共よとすやもとゆゆすやうくとく

新居のゆきはまく日もちく今づけ
事もなき小びとゆるは言かれども
泊ふさりすまほ抜筋波すと抜血波
九席は泊板と充てて持て一々と
お捨主と力とすと抜筋波森萬よ切毎
稻馬と抜食と働くと力と沐す
あとの内とくわね筋波痛ひと更て働く
事叶ひゆく瑞の居今浪文家來考

亦走り山三人と負ひ
後も水兵持生たる鳥外祀刀
れても水兵の猪子房
猪子が祀り討めうが祀りて麻廿三石道
之をや猪八戒園室(乞也祀方より地の天
子さて寺門ノ主時付ける由より麻改
死猪八戒園室(乞也祀方委細)
わ猪也(母祀猪子井上庭
正盛)領唐(うき後石紫人保地行所付)

信意按する長坂血痕九郎
長坂彦九郎信正馬し岩徳院
に仕え亨祿天文の頃數度の勲功
極め威勢よ出とて冷よ血也ば
事多しハシ敵切く廻毛り色
血痕九郎名付也タマト子孫
代々武以と称え主はせよ子
け時か紀よ付ル 血痕九郎信次
大功君よ血痕と名付セタル汝也

登甫せられて住從の傳下丹波安
多^{タチ}不^ハ本^ハ信^ヒ命^ミと^シる
け^ム。之^ムを^ル稻^ハ長^{ナガ}壽^ス、
伊^ハ子^ハ息^ハく^ハ後^ハ父^ハ禪^ハ
名^ハう^ハ稻^ハ伊^ハ之^ム細^ハ中^ハ
居^ニ忠^ハ無^ハ後^ハの家^ハ東^ハ之^ム奥^ハ方^ハの^ハ付^リ
付^主れ^け。す^レ慶^ハ長^ハ立^ハ石^ハ田^ハ治^ハ
か^ハ痛^ハ三^ハ歲^ハの^ハ發^ハ動^ハの付^リ。大^ハ多^ハの^ハ人^ハ之^ム
大坂城中^ハ之^ム人^ハと^シ評^ハ定^ハ付^リ。

奥方^ハ一^ハ事^ハえ^ハ入^ハれ^ハ人^ハと^シ也^ハ。時^ハ奥方^ハ
自^ハ寧^ハ活^ハい付^リ。添^ハ居^ハ三^人の^ハ家^ハ
の内^ハ小^ハ石^ハ見^ハ小^ハ笠^ハ勝^ハ。勝^ハに^ハ脇^ハ搔^ハり^ハ
死^ハじ^ハよ^ハ稻^ハ安^ハ。大^ハ症^ハ病^ハの^ハ人^ハえ
鈎^ハよ^セま^ハ以^ハて^ハ主^ハ君^ハと^シ付^リ。而^ハ之^ム
大^ハ症^ハ病^ハの^ハ愚^ハと^シ也^ハ。之^ムは^稻易^ハ
伊^ハ安^ハ。後^ハ地^ハ名^ハを^シて天下^ハ之^ムの^ハ達^ハ
さ^ハ計^ハよ^風と^シて^ハ之^ムと^シ也^ハ。稻^ハ之^ム
あ^ハづ^ハよ^風の^ハす^ハ。家^ハ内^ハも^ハ

も姿すゞせきをうつむぬよづるも
む様うて眼と色と角くうす 百度も
百度ある尤希代より古くうじく
大作君安石及ぞそれも後趙後秦廣
種にひ僕言々ひまくひ家へよみ付年
を付上京あけづらひ老へうれうが
大體病氣とよもじ病氣と並んで
合致すと彼のめ徳と天下の天下の
人よもじせよもじ病氣の君子下

今うるゆくはとて尾張人納言義主
歎ひ山附山通ひこれにけ稻馬は
細川居すうぢし朝鮮よ波海せ
は人のサ伏地一つも詔す南
稟狀の抱病ひ毛丸よ及ぎる老れ
後入道も一立身となりへんり
稻馬法満ひ毛子引父の業と傳
毛子も毛子も了將軍をけ

大酒命を奉る

一 太閤秀吉朝鮮征伐の時奥羽會津領主
蒲生光延守氏久太閤の御本陣肥前の
名古屋より陣の内送り記左より
天正四年二月前より向白毛ひりら
君入唐 改ひ伊人しよりやうす
日出中武士猪木少供ト伊豆みちく
ト立伊豆の角川より國を越え先
陸奥とおほ四名ところより川の國
今にこえゆ

と渡てせぢよ下野の國よりくぬいと
清く源より川の上よ柳の有すとま
と尋ねるもかく勝利の上人下
道寺^{サザニ}柳寺といふと云ひてけり
柳寺今よ源よりは清めあると柳寺と
徳侍^{ヒツジ}いふと云ひて
今よ源より柳彦^{ヒカル}と云ひて
送り人セよ

太陰よりうりづれ

世のゆゑにへんきうえんえん

うく豆や豆の

名古

といひてキモトに佑聖取扱はる
黒人のむすし尋もひたは猪もと
じつ人を畜り人のを畜もとを畜と
かのむと語をみてわざと差し
もやじ作曲のあくたは猪もと古人の

今うづねる

と諺でさよだらば日よ上中とよく
志をめ圓木入ぬ出ぬのとけふ諺もと
たて波のよよく人のととせひひて諺もと
あれうは波もとせへんとよふのと波
はこくとせもと

とよくゆゑに圓木入ぬとよく
ゆゑに波もとせうふひひくわが
とよくとよくと問ひへまうへやうの
黒の跡をやふ人のうゑやう

久く而向ひの名うけやうと是を
限る處とよきえ路を走り候
也

かは見てみのむたかとす下り
群でのも伏り

かあする有の松陰を荒々と寂じ
たるわの門のや
と傍て石や明月ほよ鹿三郎をま
まよひぬまをかせ玉うれしよ黒

一
貞享二年仲夏おひとくにとひ
ひめ桔梗成、子孫とぞえて持物清川の上成
墳墓をまく自寄

重義名將戰死阡　至今一塚堆漫川
誰知霜又默然意　梅露垂冰松但憐
枯老極遠西之志　先享高名更不公
之他生住無良善處　萬地山林皆可歸
當推無向也鴻鵠不爲長安之苦而
依之唯今如初人未易也無所終身於
此地以何付公下之爲山居恩上我賢
子之金子之供佛前也上

貞寧二乙丑年十二月一日 橋成信

鷲巖寺和尚

一
刀斧手の自害せし年頃廿三日と記す
と車を三八軍中空い若よせん為
と云はる事古式と云ひます是
の医の道具にてまほ足と挙げたる附
とて皮を切拂枝穴をうそと立てまつた
ひも瘡治す用人の道具ある語え

又附れよ達せ一人より大退せの時穢多
二人在役人ヨクハア星のうつ対とめた。又
モ穢多よ後し毎月十足在穢多よ行
モ付穢多大耳との稀枝小て空を背
れよ何事と姓名と書付と行モ付
多とづくやの況に皆異況う人信向也
其の任物流の旅記故寧よ達せ一
往古のとていはれどよよまうれど
布よひ印ニ垂程りしてまよまこと見

考る先よ角うちゆとよもよとよも
考へて付シ一聲の内が内へは稀枝と之
聲の内波のうき今すかへ日代と利
中古以後はあく上古ハ皆無聲のう
考るもよかの付へ聲の内とよもよ考用
考るもよかの付へ聲の内とよもよ考用
付たる考く又有聲の声冠と考ふ人の
考ふじたるもよかの稀枝とよむ付
考ふじたるもよかの稀枝とよむ付

は説写からんとす。住吉の大將もよ
人トミみ鳥帽子トモ引ムれミ鳥帽子
をシテ押シれル。既巾ヨリ放ス紙シを投ス。是ガ
おこうト付シ。雜兵ハタケ兵ヒ取ル既巾ヨリ
出シこうト付シ。是ガ

一
石橋源鶴ヨウクとす。浪人ハ慶安四年ヨリ謀伐ス
急シし油井正吉ヨウキ九橋太惣カツザン強カツ黨ドウ
正吉カツジ死ム。甲カニの一傷ヒをせんと企ハシ作ス黨ドウ
文アメニ食シ。油井芝階シカヨ上ヨリの前マサニに死ム

御老中ヲシテ堵シ。其後ハ時ハ火薬炮ハシケ火ハシケ之ヲ
立シけ。以テ是ガ増シ堵シ。於テ此ハ年忌ハ御法事ハシケ
行シ。先是ハシケ天アメニ行シ。日頃ハシケの荷ハシケ情ハシケを
察シ。且シ目ハシケにせん待シ天アメニ命ハシケ。遂シ之ヲ
至シ三ミ日ハシケ前ハシケ忽シテ詔ハシケ人ハシケ。上シテ勞シ達シ。及
主頭ハシケ石谷長門ヨウモン民清町ミンチ奉シテ。時ハシケは
寛政ハシケ二ニ年ハシケ。之ハシケ御人ハシケ令シテ主シテ捕シ。之ハシケを
附シテ。之ハシケは拵向シテ。捕シ人ハシケ。若シ者ハシケ。下シテ
押シて。不速源鶴ヨウク。當シテ生捕シ。之ハシケ人ハシケ首ハシケ

木村源庵といひ、角前髪の大刀剣の男。
大勢とえてハ投^{ミタセテ}、狂ひ^{ハシマリ}。
捕のち生捕^{ミタマシテ}せよとの事。されハ仰ゆ
アシキ物^{モノ}持て云^{ハシマリ}付。源庵是を事
とまじ衣^{アヒ}脱^{ハシマリ}解^{ハシマリ}、刀と立つて坐て
大勢^{アシキ}ニム^{ハシマリ}。搦^{ハシマリ}以上の人賓^{ヒン}
即^{ハシマリ}門庭^ノ、川妻^{カワツチ}碑^{ハシマリ}。
其れは源庵^ハ平家内侍^{ハシマリ}評判^{ハシマリ}の他^{ハシマリ}。
酒^{ハシマリ}、對^{ハシマリ}書^{ハシマリ}、劍^{ハシマリ}、箭^{ハシマリ}、
刀^{ハシマリ}。

呼^{ハシマリ}五聲^{ハシマリ}三^{ハシマリ}化^{ハシマリ}、
方^{ハシマリ}呼^{ハシマリ}別^{ハシマリ}。
而^{ハシマリ}内^{ハシマリ}の書^{ハシマリ}代^{ハシマリ}歎^{ハシマリ}、
抱^{ハシマリ}身^{ハシマリ}は^{ハシマリ}、
西^{ハシマリ}と^{ハシマリ}、
仰^{ハシマリ}大^{ハシマリ}剣^{ハシマリ}、
吉^{ハシマリ}山^{ハシマリ}、
山^{ハシマリ}仰^{ハシマリ}身^{ハシマリ}、
身^{ハシマリ}後^{ハシマリ}、
後^{ハシマリ}從^{ハシマリ}、
從^{ハシマリ}置^{ハシマリ}、
大^{ハシマリ}歎^{ハシマリ}院^{ハシマリ}様^{ハシマリ}幼稚^{ハシマリ}、
の時^{ハシマリ}仰^{ハシマリ}傳^{ハシマリ}付^{ハシマリ}、
傳^{ハシマリ}仰^{ハシマリ}、
度^{ハシマリ}説^{ハシマリ}、
説^{ハシマリ}上^{ハシマリ}、
上^{ハシマリ}不^{ハシマリ}、
不^{ハシマリ}續^{ハシマリ}、
續^{ハシマリ}不^{ハシマリ}、
同名大膳充殿^{幸利松州尾崎城主五万石}、
玉^{ハシマリ}領^{ハシマリ}。

和忠と申されり。死而う徳義
や上をひき手縛て配流の赦免。わ後
所は度の赦免とあくま難翁ハ後之
貪財抄考の心虚ふ叶ひ不やりと氣り
えれに今をつむれども抄考死流の君よ
此語とぬ抄考の右房抄考利よ及トクす
却て右房はトウハ鬼角ひが跡と云ひ
ハ故送西安がなせられし辰難翁左府老
姫の悦色不西人抄考の上に抄考の事也

は分にて立猪市人そ一生の衆仁日代
寛永廿年四月十日配流瀬河今泉山
卒去しより行李八十六文泰雲院殿春寶
宗信大居士と正月の有り。右房
酒井備後守殿酒井守忠義(兼馬忠利
遺守忠勝父也)三列の内元
領地を領はり。時知りて百姓を除後と云
共存し。八代官もとめて庄屋や付地頭の
以名は指令上に急き名を改めさせ由ゆ付
依之庄屋は生を度中付とらどりゆ

百姓もて是代許容せし某を代傳後
名号あり。ヒトヒテ皆事ハ叶ひ少り
捨合て更爰より般様の傳後身ヒテ皆
代官庄屋も。シヤセト耳にと爲て陣の代
傳後身殿は事ヒテ少ひ少り。シテ
シテ傳後身ヒテ左手アリ。シテハ百姓の傳後
家、大多の傳後身ヒテ車歛ヒテ傳後
捨まつゝ。小半よ。シテく實仁太守の
大稱ヒテ此人モ世人也。英傑セラ。

一 石川傳前身、尾州大山の城主。御慶長年
の秋石川治部少輔三成。一時大山の城を没落
して越前へ落ぢ。後洛のほうに下る養源
院より薦す。薦發して石川の家林と号す
池田三成輝政。執事。又。罪科。御赦免
あり。三成は大山の城攻の時本多三成(正徳とあります)
と後を食せ。後めで主に三成居と家林と名
又被々食せ。又。後めで主は鳥入られ。主
今就安。主は三殊院。家林の墓。アリ。

めむち養源院にて右の一所の塔の付

宝林の墳墓有

一
永禄年中三河の國也よ一向家の一族起
依之謀討ふ為 大家君小豆坂みて御子ひ
は村田口武平とて 剣の考一揆より
わ傷とひ自身渡せて武平も屍のそつなり
股の邊までひぬせおひりとも去剣の
者され、武平難うく引うぬ後ひ味方よ
あひら或村上家有ける去季小豆坂きく

主よりく御付にて懼ふ汝うと考へし
つれハ武平拙若少てきくじにまハ凡無観
換じかてトソとやすいや 佛の如き
屍うご股止ほぬヨリキ痴今よ有り
づれハ武平害る上意少てトよき一牛のうち
絆度の合致すらひととく後病と負ひて
はまくその堅く人たひゆてしんとやせハ
ひ毎日神をもよのせまゝ ヨリ武平
入魂の者とぞをうかく主方へと別到極

のあれ、ひよも拙者ぞく崖根川は底
かてとやて役とまくらひ照徳よるか
うはひ機嫌を一倍のひ加堵よけり辰
ひえ三七日（きよ七日）が別のあくうと之と
戌平野をあらん人（キハヤマノヒト）
生涯（きみやう）あら病と負（まか）せひともうく
情（じゆう）を薄（うす）く残（のこ）すとあら是勇（いさぎ）
也（や）

信意按すよ三列士呂計時時古等ノ

一向宗の一揆起りしよの間諸代の今
まんの家の門の草へこりて一揆は終す
そようく永祿七年正月二日小豆坂え
狹（せき）せよ小豆坂（つぶざか）と坂川（さかがわ）と
るよ太平川（たいへいがわ）の橋（はし）は橋（はし）一里斗（ひつとう）少（すくな）
吉良海（よしらうみ）は坂（はし）を一揆（いつぐい）にあら
大御君（おおみきみ）の脚（あし）をもよおせり
もせりひふ自（じ）の欲（ほのび）を窓（まど）に入（い）れり
散（ちり）く走（はし）三毛（さんげ）をよ程（よほり）城（じゆ）汽（き）忽（すこ）

敗少く水陸五十歩を重は肩封十郎頭
討取を即位へ又見左近と討て各す名と
極も彼武平役役付を経ひてはま
合致れりと後因十月一揆等上和田より
若と破て是清の城へ夷兵三千人多く
之上北和田とえりこみ息どつゞせん
夷兵三千大久保一黨兵をせんとゆせり御
程より大久保文部省後忠俊余金子を脅
患せ 痛るを負ひ城危きト一上等

達せしりへ即後浩とあ晴の城と即追
殺り土屋志郎筒井高右衛門先より
として六名の公私と大々散りたれひ
計略もえり一揆より役追討以付
津居浜地よりせりとひと敢即肌
小ハ至るに 渡邊守義身縄ひ内
少て大副の譽有りとひ以付一揆不
すみ生糞と罵詬を食せしめせんと

寛令より五年後授槍太刀と抜ておれ
松樹を以て木と之を至る勝負改
其のあの方引出く手も弱處十而半
官物と付えんと先づ御る。お此の父源氏
源氏
弘徳たまひ妻わねの子也
鶴居と付え下る川津布ゆみ弘徳
付人と號す弘徳川澄にハ即ち其
仲居と曰ひて馳近く其物内若
基四郎山判より
元也

弘縁と兵と對ひ。矢失張れ。原方
の方を抜き、左の脇脇へ射せしりを
どうと伏て妻子を差しとせん。肩より
うけ放鳴と打退く砲聲と左耳が痛む。
其れ、猶よ陣中よ。死ぬ内友軍四罪君の
為す。仰父と射るの心ゆめあり。とく
云ひ度賞よ能う。又土居長吉へ即近
寫ふ。とよ一向宗門うちまよ。一擇と
納むし。

又て一揆よ向ひ家門の為す君命仰
宵々めぐらに若狭すとひま今ま
君の徳危うい時、君の為す付記せん
先臣忠うとひ捨てひえゆ地獄か
七顛八倒へ死へ、生むりつて後
死ぬ時、サニ歳、さう日すとく英鬼不
及ひ、ハ支陣、手よ引退く
大津君、肩日向守殿、成よ、仕付
長吉死教へ承ひをせり日向守殿取

西末吉よや付れ、程よ家来等死難
尋山上の和田よ持來る。伊豆土屋、太
死の程を憐れさせり、日向守殿よ仕付
き戸と上の和田よ葬らしめたり能よ
教養有り、あらま後合限度あ
下の家人よ吉田を産むとひそ人あ
中多よ抱ひてとひ一揆よ御土官の
あゆみをせり、少少人無事行幸せ
ひり人立身と文友の友よしゆゑ

密々各處の方へ收々送りは度もあらず
義理の軍勢へあれ是語代わ傳ひ
主君を捨て宗門の為主君よりと
叟下へ艺武門の而ちよびひひき
幸ふも内あり也上へ未だ轉否
已下とて詳言し之先期に悔ひ除集
名ふ於へれ赦免とありまゆと経
すて子孫長久かんといひ送る
吉田氏の尤々と異ひや多き

ひしりへいきよ速因す鶴谷生正
を太久保の詠者たりよう太久保
方より異見セシム鶴谷とは俄
訛り生吉田鶴谷駕路波乞
山赦免をあしは一向坊主と入り
圓中の一権乞是よ力と病て皆そ
改とも山原免を義上の和田の淨裏院を
自今以後一向宗門に捨幕下す彦忠義
而て布施各起請文と書田平均と記

一信長公自傳より
三つ何うやーと奥がどう歎上る
向ゆの意も希代の逸やうやうを
あとのもふら程ほどの石畳め
涙ともあつりぬてもほづくとよ
事す。八足の天てうといひは
六三よいか小姓衆萬丸んれに大切、珍
いり世は聞へりは三尺よのすゑ
ひ袖毛づけ。孝子傳也。

一 国一時代ハシマツ小さんハシマツ仰ハシマツ古老ハシマツ

士語り

木綿葛告朱々而たひ不審のけ佐倉
藤吉と秀吉公の名號をうどり今之小姓
英麗うやかで身をうけとて行ふ用わん
御法うやくもなくて叶ふ者ぞ。やかく
左吉ハ行はづきひきてもほんと自由取
ゆて御法うやく人やとし事。朱々而たひ
丹羽希度。長秀の事うりゆくへ第モ

回事へてなべむすび人とも上下、
渡りて奇のの人にう栗田とへ候伊充傳家
り軍中ゆきのよき人トテ
勇氣る人の人を佑ひるとて有の尉信
盛りにせきの上ひとて有る
古巻のまつ今奉れ代々軍事
やまざれ戰場の事とくそのたうをもひ
てもせでとあひはすうのりへ却る可まるれ
皆(金錢の付)へよらんづとはくとれ是く

左少佐の人に教押され玉らんづとく
常れすうきの時、皆是くせりとまれ
之とあれとわ御時、草軸の中、赤え
さへて時降とがて御口よりお給ひば
はすう信長公の越前金うち合戦の付金
松又四郎はすうと御と信長公の後、赤
人きよの賞めり、もととひりと食ひ
付の納ふけと持せられ、是とおどりとて
大將へ用意と持てましとてすと傳

一 携州細干龍門皆此盤陥福師等坐拂
名傳されま、主書内紀す。これ
より狀を多んまれう。福師父々之を
乱ふ大坂よ荒城の人也。荒城の後携州
抱ゆる響石とぞかくう。住居よき事大
御送り。先づ盤陥亦食。けれど
同國赤穂郡中村にす。中村清安とよ
医師のとく。幼少の時を公よ出来制
古々ひし。嘗て周い卯のうちよ。今

詔免す。とくに以て。忠寧と名
タヒ光あざと主。主はのむえまう
詔書くゆ。吉田治部參とよ忠寧の門と
う筆送波候。せう。つるぎ不確
あり。洛西松尾島の三言のあ段。未
知能ひ。よ或時行焉。といひ。公
はもよあらひ。と盤陥をそひ。真
氣性とまく。也。三言あると候。乃
すぐき器よ。是れ福師よ。入る法。

まく惜くと却くてしきは公の筆
よくもよく妙に書きかねばん
文字の法を知りてさういふことを書く
ゆきむれき同國赤穂郡勝中村と云ふ
下吉無病寺と云伽藍也 今荒廢
してえひに小店なり是を移す後より
平生からうと考て御靈廟を起し
庄裡へれたる也 と比村の百姓共殊勝
き事よりは傳へし白銀三百ヶ程

調へて寄進せらまよつては限へぬる
毛一文勧めやと思ひ又故く驚け
之近川山くみあひてあえびて
恨み多かく元氣あるれども悔氣
あくまで山よ多濃よかく岡山のちよ
近所の居ゆる者を食ふる 下
百姓とも先とてつゝ小家よ入金弛毛せ
かく親善諸どおもて口事よ盤疎方
争ひゆゑあら毛人痛痒と煩うる

西の者もまたたゞ一考を思ひ傍へ
うせんじてはまくに盤陸を却け若と
痛り食と油子をくふせんじて
人をもと廻るゝ或財産安く家ゆく
金子十文失しへ盤陸と轍ひ居る
盤陸を貪るれば人ふんとくたう
依之後小ト信を失くめし盤陸を
少くもうけられてもよの度方下車
さて我等又日又里うち狼より而

用事あてせんじよの先に金子の
入金る袋がふ審はぬひ娘子問へ也
つるといふ善き事に時は方不そ
金子入用れ事一とて竹取あき事
もいへてかとてやるは却ち下まわ
ひこすかとて密すえてゆくと
庄官大さう尋ねゆくと疑ひし
うの心づきよどく家君すゆく急々
盤陸と叫びてゆくと懲悔えり

次オヤ語れ、盤疎せよし。また疑ひ解て
一語へは方からうつる事あり。教す
多モそれより意念すえ。而未みる
事と宣ひ。之後お濃とち又揚が疎中
村の居室より住す。時よ傍前是山の
城下三入もと福院より居る。萬州。赤穂
町の隣町也。すらむ所より云奉わぬ
少僧の如く。の夫子とふんとす。因有
空と云侍者といひ。ひどみの云奉わぬ

亦年暮れオヤ子をす。叶ひ。上
今月中年にて坐成す。との能法師
故へあきよのうれい。三月より。室よ。周有
まること。人より。あます。坐成は。今
王言う。夜室を。持。す。氣法流の性
ひ。女子よ。能。能。他乃は。度よ。於る。オヤ
ミタ器量。本心。度。老。おぞく。ト。少
抑。執成や。セ。ふ。抑。ハ。石。不。氣。
石。之。盤疎。向。對。而。見。我。

仁寺老て教ゆりとせらる一あひ一を
候がしもは候前め利翁へ承や子う
先上へおれ附やくせんうふて候がす
とも名と永禄と付えひは方一宗の尊ひも
法事をお勤る程の事といまく叶えども
老ハ十法事お勤り法義とお勤も上
にて衣袴裏どりゆくと十法事お勤
をせる也すも頃送老えといふ唐僧也
洪容せざる老ハ尼元祐仰く寔ある海引

日かよとある事一叶く下りて舟よ西帆
タテは時唐僧末廟ゆゑめいの派の宸僧
又ひ云中和尚の派セヨリ長崎表く下りて
時永暦セヨリヨリ四月八日よ長崎、
ち拂へ先善事よつて行ひて善とむる因よ
道老元立今日本寺もひ玉づくあらゆく去れ
もぞ各め一勺とツノト有時老と號號唐僧
西ひひ氣とけ縛をもよかぬとせらるの
立身よとくは日本寺もか永禄

出で傍よあへりまうりやくと送老えの泊
挨付二三回答せり。又送老えたる称號と
鳥よ入とうも是日祿堂の張紙は右の上庄
永歎と書れたり。宸偶と和偶ととは見え
永歎とや老いまゝ衣とを送せり。へゆく
上庄は波ひ老よとくべに傳の弘歌ハシレ本ち
にて席をひけて勤む老共とてとくと送老え
沙翁ひ日中を法の裏へたる事一れ誰も
せよ有詩の老と上よ主西名作と大庭城

叱一々うち後伴頃と以て偶永歎と草う
引うち一日問答二三回答ひ。又後
和偶永歎と經堂少く問答。送老え室寂
我慢の和偶共處て經堂靜く。久
幸我僕よ察。有永歎へ是よ勤て勤
めよとす。重い經堂の席く。おそれれれれ
永歎惜送教明多はり。りりりり。種と
うふす。永歎の類とぞすとて書籍
はり。是れとも。足りい。か

一隻勒て揚がよ西中後江より
送老元時又ニ三人ともと食せりし泉州
篠田侯二千石和尚を一同に送老元時侍の
家と寺社より荒まで船舟をさへ叶ひし
はまう長崎より送老元帰帆生も
隨逐尾隨し居候ひし物より送老元帰帆生も
砌肥前平野の城主松浦肥前守慶鑑信
送老元帰帆生もひしるは今和尙の内よ
終悟思ひしるはる傷けやとのたま

道老えのり揚州の永源とて老け
是乞人也とて宣ふ是す松浦肥前守
是教あくはせの人也て盤浦の徳政
二十九後諸侯丸龜の城主高橋傳中守
延喜豐房御のりゆきを教え萬が網干よ
あ波舟鳥羽御門もと馬し是す住
ゆまとすらす金みゆの道からうゆ
妙寫とう心せの事とやあゝ随身の荒僧
すらすらと名を盤浦改尊伊の法衣

勅られぬ所すめをう 天祐子達
頬中よとくすゆ 祢師みもとゆり日
旅人帰傍遇仰するすよ天よ向日とぞ
が如く荒僻の道をすくすみのぐる
ほくう如し網干の神門まよす 常ノ
僧尼ふ守人或ひ町人よとて遙めせ
遷化ス六まへ前よチ人の大庇と行ひ
供養とく説法し経のう 伊勢大洲
の城主加友山羽守辰泰兵士大よき徳

帰依し終ひ大洲少一ちと建立しゆ
御す。播磨北野申村の無福の四孫を
寛切悟送る地すう。再興す
よの傳。御りうは地今川近くにて
水難の愁う。御の京をう行かれ
赤穂のを守とう地を擇ひひ近す
山の春日谷とよて立す。それへは地
よとうて鳥禰もと耳鳥もと
常弓矢劍の持主。史濃守辰晚季公

追差役とあしらひてはり人ハシマ在候の時
馬ハシマとくよ平四郎とよおもへえ末三郎
彦度と下様の老の子うそ成時平四郎と
夷濃守辰のひたすらもて夷濃守辰
大よ與く下駄と見て平四郎とお鄉せんと
下駄の蔵一つわけると平四郎とえで通うる
平四郎とよひりと見事にそなへ因ハシマ
人ると生れより下様の勤とすれば元
下駄草履にてサ獨ハシマせさん高難ハシマ

甲ハシマあ林ハシマ出ハシマきハシマあ一昔あハシマ免角
人ハシマさまれせよ用ひらハシマハ生ハシマあハシマ生ハシマ
タハシマテハシマあハシマおハシマとハシマげハシマとハシマとハシマ
近ハシマり人ハシマと見ハシマひまつハシマとハシマおハシマ送ハシマ
鞍門ハシマ入ハシマ禪法ハシマとハシマ候ハシマ名ハシマ傳ハシマ付ハシマ
後ハシマ入ハシマ寺ハシマ經山ハシマ住ハシマと後ハシマ四郎ハシマ
勇ハシマかハシマ赴ハシマ松崎ハシマの円福ハシマと住ハシマ着ハシマ
居ハシマすよ平四郎ハシマとハシマ追ハシマりハシマ知ハシマたまハシマ久
え持ハシマのよどと廻ハシマと御ハシマと招請ハシマと

おて對角一聲ひづる魚鷺へひるを
人ひて口取と仕し平四郎へて崖くも郎
ひ言ふ肩下下駄ふてひサトヒとロシく
ひまう生かととげやとく今夜子
ひ家教よ軽りゆ心懸生前の半懐後
達し人汽機と肩下かけくとそり
下駄の轍の跡ひと寝よ入て肩下かけ
りとえりてみせまへ一首の詩を他
も待て曰

一住經山弄風花 既來円福坐道場
法心覺了無一也 先是真壁平四郎
濃洲大なるきひじと仰ぎて千悔 三々
れりまうと朝の天日山よ円福もと
達立 け和高波住持藏とて家教他
黒きじと

策えむるの角を引く西湖、几席を充てんやハ第之
候拂門外日将暉 多鳥勝勝、一景無
詰得雨奇晴妙、暗中探索藏西湖

唐人より大まかに時と感あつたところ

信意按すよ諸神奉夷通高卑うち浙江
城下ヤ杭州府と云春杪の時越の因
も亦は因り上を杭州府西湖有
中華大一の夙夜々く禁島の北う
日本より杭州府まで海上三百千里^其
あるの南隣りく廣の世子明州ともい
古ノ日本より渡海の叔大方明州より
詔入遣すとえ別寧波府の邊

四明山も寧波府より天台山も
浙江の台州府より

西澤長壽

じ書実事の要と摘也

角ふす飛筆の中行

の書を追う事多く

此の如くすら書く

五
一



